住民と行政の間に入る通訳のような役回り

深堀地区景観まちづくりガイドライン

地域で活かされる
長崎大学の
知
Knowledge of Nagasaki University
Vol.3

歴史のある街並みを研究者の目線で調査

地域の個性を活かした景観まちづくりは、全国各地で行われており、長崎市でも、二〇〇五年の景観法の施行より前から取り組んでいます。しかし、建築物は個人の所有である場合が多く、うまくいかないケースも見られます。そんななか、長崎市南部の深堀地区に、二〇一一年から長崎大学の二人の先生方が入り「深堀地区景観まちづくりガイドライン」策定のための調査を行いました。携わった水産・環境科学総合研究科の渡辺貴史准教授にお話を聞きました。

「当初、長崎市から、緑地を活かした景観形成を専門とする私に、ガイドラインの策定を手伝って欲しいとの相談がありました。私だけでは不安だったため、建築を中心に景観形成の研究をされている工学研究科の安武敦子准教授にも協力をお願いしました」。

深堀地区は、長崎港の入口に位置し、江戸時代以前から城下町として形成され、長崎市内で唯一武家屋敷があった地区。今も野面積みの石塀や外敵を防ぐ直角の街路が保存され、恵比須様も鎮座しています。安武准教授のお話です。

街角にはカラフルな恵比須様。

風情のある石塀が続く武家屋敷通り。

みんなで「深堀さるく」に参加。

円成寺の珍しい五色の塀を見学。

このガイドラインは2年以上費やして完成しました

安武敦子准教授

「私は石塀の保存状態、水路の変遷などを調査しました。この住民に配布するガイドラインは規制ではなく"協力のお願い"という緩やかなもの。住民主体でなければ意味がないので、皆さんの思いや何を大切にしているのかをヒアリングし、ガイドライン作りに活かしていきました」。

「こういうプロジェクトにおける大学教員とは、通訳のような役割を果たしていると思います。住民の皆さんの思いをガイドラインに載せられることばに置き換え、計画の実現に使える行政の予算や時間は限られていることを住民の皆さんにお伝えします。このように計画をいかに実現するかを念頭に置きながら、中立的な立場で住民と長崎市に提言しています」と渡辺先生。

武家屋敷通りからの眺めの保全や、水路の排水管の処理の提案。石塀の補修のための石バンクの設立。バラバラのサインの統一など、ルールや提言を盛り込んだガイドラインが昨年まとまりました。

学生と行政、住民の協働が新たな変化を引き起こす

現在は、ガイドラインをもとに最初の事案「県警アパート跡地をどう活用するか」について、長崎市と大学が協働して住民対象のワークショップを行っています。活躍しているのが先生方と共にフィールドワークを重ねてきた学生たち。グループに分かれて意見交換を行う場面では、中心になって議論を進めています。地域の自治会長、西清さんのお話です。

「私たちから見たら孫世代ですよ。でもこうやって調査や会議で若い人たちが大勢この町にやってくると、雰囲気が明るくなりますね。これまで私たちが気づかなかった視点、例えば三菱の工場が一望できる視点場があるとか、この木さえ少し刈り込めば海が見えるといった意見を出してくれます。昔からある神社の石を見て"これはパワースポットだ！"と。宝の掘り起しのような作業が楽しいですね」。

もともと福祉や防災でお互い助け合うなど、自治意識の強い地区なので、ワークショップにも多くの住民が積極的に参加します。意見を聞き出す役回りの学生は、普段あまり接触する機会のない高齢の方をふくめ、参加者それぞれが発言できる雰囲気づくりに気を配っていました。

「なかには公務員志望の学生もおり、彼らからするとインターンシップをさせてもらっているといえます。上手くいかない場面では、住民の方が助け舟を出してくれることがあります。まちづくりには住民の方との協働が不可欠なことを実感でき、貴重な経験をさせて頂いていると思います」。

「聞き取りをするときは、ただお話を漠然と聞くのではなく、年代や内容を確認しながら具体的な情報に置き換えていく作業も実地で学ばせました」と両先生。

ガイドライン策定にとどまらず、行政と大学が住民とともにまちづくりを継続することで、新たな変化が起き始めた深堀地区。景観形成のモデル地区として注目を集めています。

自治会長の西さん。
素晴らしい地域新聞を自作しています。

ワークショップで住民の意見を聞く学生。

何度も通ううちに顔なじみもできました。

意見が出やすいようカードなども工夫しています。

渡辺貴史准教授